

人物像という補助エンジン 久永草太

・布団から今朝も出なけりやならんのか一晩かけて温めたのに
角川「短歌」二〇二三年四月号の月評で乾遥香が、久永草太の歌壇賞受賞第一作「たこたこ」から右の掲出歌などに触れ、「出産を感じさせたのは受賞作が生物に思いを向けるものだったからか。解剖により殺す側ともなることを詠んだ農学部獣医学科の精神が、産む側の葛藤に似る」と述べていた。

作者、つまり僕としてはむしろ「獣医学生」というアイデンティティから切り離れた連作に仕立てたつもりだったのだが、そんなのは作り手のエゴに過ぎず、獣医学生であることを詠んだ受賞作を踏まえれば、なるほど乾のような読みもあり得る。

作者がどういう人物であるかを踏まえて歌を読むことは、ときに歌の解釈を助けるが、作者が歌に込めた意味以上の情報を付与してしまいう危険も孕んでもいる。この危険に常に晒されるのが、夭折した歌人、その歌である。石川啄木は代表格だが、現代では笹井宏之、萩原慎一郎、安藤美保らの名前が浮かぶ。無論、晩年の健康状態や、存命中の歌集か遺歌集かなど、それぞれ事情は異なるが、共通して言えることは（無礼は承知だが）、故人や遺族へ配慮しながら批評することの難しさや、不謹慎への恐れがあり、これらに抗って読みを展開せんとするとき、作者の人物像や生涯という補助エンジンに頼ってしまいやすいということだ。

「ねむらない樹」vol.10には笹井宏之の第一歌集『ひとさらい』刊行十五年をうけた特集が組まれた。笹井の歌の解釈し難さに苦手意識のあった僕も、この特集に刺激されて、改めて彼の歌集を読む。

・あの枝に湯呑み茶碗が実ります 耳を磨いてお越しく下さい

笹井宏之の『ひとさらい』

〈一生に一度ひらくという窓のむこう あなたは靴をそろえる〉という歌の直後に並べられた一首。湯呑み茶碗の実は熟れたのち落果して、けたたましい音を立てて割れるのだろうか。その音を心して聞けと言う下句。この音が死の瞬間の音であるように聞こえるのは、直前に置かれた歌の効果か、夭折の歌人の歌であるからか。その後の笹井の運命を知らずに読む、という選択肢を与えられなかった世代としては、彼の連作に潜む病の気配、死の匂いに過敏に反応している自覚がある。補助エンジンの読みである。

しかし同特集に寄せられた文章の中には、瀬戸夏子や吉川宏志をはじめ、笹井の人物像から積極的に距離を置き、作品を評しようとするものも多く、読みの参考になる。例えば、

・この森で軍手を売って暮らしたい まちがえて図書館を建てたい

この歌も長く理解できずいたのだが、東直子は笹井の歌は音楽だとして解釈した。掲出歌の「て」の多用を指摘し「森で軍手を売るイメージを、まず思いついたのかと。（中略）あとはもうリズムで導き出して」作ったのではないかと対談の中で推測する。

補助エンジンの切離に十五年を要した、とも捉えられるが、十五年読まれ続ける歌を遺した歌人の力を思わずにはいられない。